

〈研究論文〉

# 小中一貫教育の実践における児童生徒の意識傾向

——質問紙調査の比較検討——

樋口直宏

## 小中一貫教育の実践における児童生徒の意識傾向

——質問紙調査の比較検討——

樋口直宏

はじめに

小中一貫教育は、中央教育審議会「新しい義務教育を創造する」(2005(平成17)年)において「9年制の義務教育学校を設置することの可能性やカリキュラム区分の弾力化など、学校種間の連携・接続を改善するための仕組み」について検討することが提言されて以来、各地で実践が進められてきた。特に、教育再生実行会議の提言(2014(平成26)年)を受けて、中央教育審議会初等中等教育分科会小中一貫教育特別部会において小中一貫教育学校(仮称)の制度化や教育課程区分の弾力化、教員免許状の小中共通化、教職員配置、学校施設に関する審議が進められ、法整備を含む国全体での取り組みへ移行するための具体的方法が議論されている。

中央教育審議会初等中等教育分科会学校段階間の連携・接続等に関する作業部会「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理」(2012(平成24)年)によれば、小中一貫教育は小中連携との対比において、以下のように定義されている。すなわち、「小・中学校が互いに情報交換、交流することを通じ、小学校教育から中学校教育への円滑な接続を目指す様々な教育」が小中連携であるのに対して、「小中連携のうち、小・中学校が9年間を通じた教育課程を編成し、それに基づき行う系統的な教育」を小中一貫教育としている。その一方で、小中学校の9学年および教職員が同一校舎で活動する施設一体型小中一貫教育と、近隣の小中学校がそれぞれの組織を維持しつつ連携する施設分離型小中一貫教

育とがあり、小中一貫教育と呼ばれていても、上記の定義に照らせば小中連携にとどまっている場合もある。

小中一貫教育の実践上の特徴としては、主としてカリキュラム、授業、生徒指導の三つがあげられる。このうちカリキュラムについては、教科内容の精選と弾力化、新教科(領域)の設置とそれらに伴う小中一貫(副)教材の作成、さらには9年間を連続させた4-3-2年の節目づくり等があげられる。また授業については、目標、教材、授業時間、きまり等における小一中あるいは小一小間の共通化、小学校高学年からの教科担任制、評価における児童生徒情報の共有やカルテの作成がある。さらに生徒指導では、異学年・他校交流として交流給食、縦割り班活動、集団登下校、合同行事(遠足、発表会、スポーツ大会)、上級学校・部活動体験、母校訪問等があげられる。これらの諸活動を通して、中1ギャップの解消にとどまらず、学力向上やリーダーシップの育成、教員による長期にわたる児童生徒理解といった成果が期待される。

筆者は、2006(平成18)年に開校した公立施設一体型小中一貫校および同自治体において始まった小中一貫教育について、理論研究とともに、授業観察、上級生と下級生との交流や合同部活動といった異学年交流の観察、児童生徒および教職員に対する質問紙や聞き取り調査等の実証的研究を行ってきた(樋口、石井、遠藤、栗山(2009a, 2009b))。これらを通して、施設一体型一貫校においては、異学年交流が活発に行われており、下級生の上級生に対する見方も好意的であること、9(中学3)年生は最上級生とし

での責任感および不安が高まる一方、6年生のリーダーシップが低いこと等が明らかになった。また教師は4-3-2年制の中で、中学校で行っている授業および生徒指導の様式を5・6年生に対して取り入れることで、中1ギャップへの対応を図ろうとしていた。

そこで本稿では、小中一貫教育が児童生徒の意識にどのような影響を及ぼすかについて、「教師と教科担任制」「異学年交流」「進級・進路と中1ギャップ」を中心に質問紙調査を実施して、その特徴を明らかにする。小中一貫教育に関する先行研究は、意義や課題に関する提言および学校や教育委員会による実践報告の他、西川(2014)や、河原、中山、助川(2014)のように、教育制度やカリキュラム、教科の指導方法を主題とした内容が多い。その一方で、小中一貫教育を受けた児童生徒に着目して、9年間の学びや意識を継続的に扱った研究は少ない。

調査は、公立学校10校(施設一体型小中一貫校2校、分離型小学校5校および中学校3校)において、2013(平成25)年2-3月にかけて実施した(以下「2013年調査」)。対象となる児童生徒(男女の無回答者は除く)は表1の通りであり、回収率は94.8%であった。

表1 調査対象の児童生徒

	一体型	分離型	合計
1年	180	276	456
2年	199	306	505
3年	185	299	484
4年	190	252	442
5年	187	313	500
6年	221	279	500
7年	314	230	544
8年	284	204	488
9年	269	197	466
(男子計)	998	1184	2182
(女子計)	1011	1151	2162
合計	2029	2356	4385

調査用紙は施設一体型(以下表では「一体型」と分離型、および学年によって質問項目が一部異なるため、合計18種類である。事前に調査用紙を各校に配布し、各学級内の都合の良い時間を実施してもらい、回収後は検票作業を経て入力および集計作業を行った。筆者は、2008(平成20)年にも類似する調査(以下「2008年調査」)を実施しており、今回はその追跡調査でもある。

分析においては、原則として施設一体型と分離型、および2008年調査と2013年調査の結果を比較する。2008年調査の対象者は、4658人(一体型1546人、分離型3112人)である。なお分析にあたっては、質問に回答した学年すべてを単純集計して、4件法の上位2件(例えば「とてもあてはまる」「ややあてはまる」)の合計パーセントを示す。また、中学校1・2・3年については、それぞれ7・8・9年生と呼ぶ。

## 1. 教師と教科担任制

はじめに、児童生徒は小中一貫教育のどのような点を評価しているのだろうか。これについて、「あなたは、次にあげるような学校生活について、どのように思いますか」と質問した結果が、表2である(2013年調査のみ実施。なお2013年調査において、施設一体型と分離型間に5%水準で有意差がある場合には、\*をつけた。以下、他の表においても同じ。)

施設一体型および分離型に共通して最も高いのは、「(C) 学校に、小学校の先生や中学校の先生など、いろいろな先生がいること」である。このことから、多様な教師がいることを児童生徒は肯定的に受け止めている。しかし次に高いのは、施設一体型では「(A) 小学生と中学生が、同じ校舎で過ごすこと」であるのに対して、分離型では「(E) 小学生が、中学校の先生に指導を受けること」である。全体的に施設一体型の比率が高く、小中学生の交流を高く評価している点の特徴である。ただし、「(D) 中学生が、小学校の先生に指導を受けること」は、施設一体型および分離型ともに低い。

表2 小中一貫教育に対する評価（3－9年生）  
 （「とてもよいと思う」＋「まあよいと思う」）

	2013年調査	
	一体型	分離型
(A)小学生と中学生が、同じ校舎で過ごすこと *	71.6%	55.2%
(B)小学生と中学生が、入学式や運動会などの行事を一緒に行うこと *	66.1%	52.2%
(C)学校に、小学校の先生や中学校の先生など、いろいろな先生がいること *	78.6%	62.4%
(D)中学生が、小学校の先生に指導を受けること *	55.9%	44.4%
(E)小学生が、中学校の先生に指導を受けること *	65.2%	58.7%
(F)小学校5・6年生から、中学生のような授業を受けたり、中学生と同じような生活を送ったりすること *	63.8%	55.9%

これをふまえて、児童生徒が教師をどのような存在と位置づけているかについて、「この学校には次のような先生はどのくらいいますか」と質問した結果が、表3である。

表3 学校にどんな先生がいるか（「たくさんいる」＋「少しいる」）

	2013年調査		2008年調査	
	一体型	分離型	一体型	分離型
(A)気軽に話ができる先生 *	75.8%	76.7%	78.6%	77.6%
(B)自分の気持ちをわかってくれる先生 *	62.5%	66.1%	62.2%	66.4%
(C)困っているときに助けてくれる先生 *	71.3%	74.2%	69.6%	74.8%
(D)もっといろいろな話をたくさん聞きたい先生 *	60.8%	64.3%	65.0%	65.1%

全体に高い比率であり、児童生徒は教師を好意的に受け止めているが、特に「(A)気軽に話ができる先生」「(C)困っているときに助けてくれる先生」が高い。すなわち、児童生徒は教師に対して親しさや信頼を感じているが、内面的な理解や関わりについては十分ではない。また一体型と分離型との間に大きな差はないが、ほとんどの項目で分離型の方が高い。2008年と2013年との比較では、「(D)もっといろいろな話をたくさん聞きたい先生」が施設一体型、分離型ともやや低下している。

次に、教科担任制に対する評価について、既実施学年である施設一体型5－9年生、分離型7－9年生に「あなたは、教科によって教えてくれる先生が違うことを、どのように思っていますか」、または「楽しみにしているか」という質問で、施設一体型4年生、分離型4－6年生に質問した結果が表4である。

施設一体型および分離型とも、教科担任制を高く評価しているが、既実施学年の方が高く評価している。また施設一体型と分離型については、既実施学年については分離型の方が高いが、2013年調査の一体型7－9年生に限定すれば90.7%であり、分離型（92.3%）と大きな差はない。逆に未実施学年については、児童生徒は教科担任制でも学級担任制でも、現在受けている指導形態を基準に評価していると考えられる。

表4 教科担任制をどのように思っているか（「とてもよいと思う（楽しみにしている）」＋「少しよいと思う（楽しみにしている）」）

	2013年調査		2008年調査	
	一体型	分離型	一体型	分離型
○教科担任制をどのように思っているか *	86.4%	92.3%	88.9%	92.7%
○教科担任制を楽しみにしているか	71.6%	67.8%	68.6%	68.2%

教科担任制をよいと思っている（楽しみにしている）理由について、「とてもよいと思う」「少しよいと思う」と回答した児童生徒に対して質問した結果が、表5である。

教科担任制が「よい（楽しみにしている）」理由としては、施設一体型および分離型とも、「1教科ごとに先生が変わると、気分転換ができる」「2 内容が難しくなるので、専門の先生に教わったほうがよい」が高い。特に1は施設一体型、2は分離型の方が概ね高く、施設一体型では気分転換を、分離型では指導内容の専門性を教科担任制に期待している。その一方で、「3 いろいろな先生に自分のことをわかってもらいたい」「4 クラスの担任の先生と相性が合わない」と

表5 教科担任制が「よい（楽しみにしている）」理由

		2013年調査		2008年調査	
		一体型	分離型	一体型	分離型
1 教科ごとに先生が変わると、気分転換ができる	既実施	44.6%	39.8%	53.5%	48.4%
	未実施	40.9%	35.6%	38.6%	41.8%
2 内容が難しくなるので、専門の先生に教わったほうがよい	既実施	65.2%	69.3%	58.3%	64.9%
	未実施	53.3%	55.7%	61.4%	59.3%
3 いろいろな先生に自分のことをわかってもらいたい	既実施	8.5%	5.7%	12.3%	7.7%
	未実施	29.2%	29.8%	55.7%	29.4%
4 クラスの担任の先生と相性が合わないと思う	既実施	16.2%	10.5%	10.9%	11.0%
	未実施	9.5%	9.0%	7.1%	10.6%

困る」の比率は低い。特に3は既実施学年が、4は未実施学年が低く、既実施学年はクラス担任との相性が合わない場合を気にかけてつと多くの先生にわかってもらいたいことも望んでいないという、複雑な意識でいることが読みとれる。2008年調査との比較については、特に施設一体型未実施学年の3が大きく低下している点が特徴である。

なお、教科担任制が「よくない（楽しみでない）」理由についても質問したところ、「先生によって言うことが違ったり、一日にいろいろな教科の宿題が出たりする」や「教科ごとに変わる先生の中に、苦手な先生がいると困る」が高かった。このことから、児童生徒への負担や教師との相性を重視して、教科担任制を敬遠していることがわかる。

さらに、教科別での教科担任制およびクラス担任制の評価について、施設一体型5・6年生（2008年調査では4-6年生）に対して質問した結果が、表6である。

この結果から、「国語」以外の教科については、2008年と2013年調査のいずれにおいても教科担任制がよかったと児童は回答している。ただし教科間の比較においては、「国語」「算数」

表6 教科別での教科担任制およびクラス担任制の評価（施設一体型）

	教科担任制でよかった教科		クラス担任制のほうがよかった教科	
	2013年調査	2008年調査	2013年調査	2008年調査
1 国語	31.6%	33.9%	41.2%	37.1%
2 算数	40.7%	35.7%	37.5%	34.3%
3 理科	56.1%	55.0%	19.6%	17.5%
4 社会	46.1%	41.4%	30.6%	24.6%
5 体育	70.6%	65.4%	8.3%	11.4%
6 家庭	76.2%	56.8%	13.0%	12.1%
7 音楽	68.6%	65.2%	11.3%	10.1%
8 図画 工作	60.8%	74.7%	15.2%	5.6%
9 英語	60.0%	60.1%	14.5%	10.7%

「理科」「社会」は、他教科に比べて教科担任制の比率が低くクラス担任制が高いことがわかる。逆に、「体育」「家庭」「音楽」「図画工作」については、教科間の順位にばらつきがあるものの教科担任制の比率が高い。そして両グループの中間に、「英語」が位置づいている。英語はALTが配置されていることを考えると、実技教科について児童生徒は特に教科担任制を希望していることがわかる。

## 2. 異学年交流

施設一体型小中一貫校においては、異学年交流が積極的に行われており、児童生徒も分離型に比べて高く評価している。具体的には、いろいろな場面で上級生・下級生とかかわることは楽しいかという趣旨の質問に「とても楽しい」「まあ楽しい」と答えた児童生徒は、施設一体型では78.3%、分離型では70.5%であり、2008年調査（施設一体型：69.6% 分離型：62.5%）と比べて上昇している。そこで、異学年交流がどのように行われており、それが異学年の見方や接し方に与える影響について検討する。

「あなたは、自分の学年以外では、どの学年の児童生徒と一番交流したいと思いますか」という質問に対する回答では1年生が高く、施設一体型では8・9年生も比較的高い。これら以外の学年では、隣接学年が高い。また、上級生・下級生と知り合うきっかけとして、施設一体型では、「部活やクラブ活動で一緒になった」や「学校行事で知り合った」が高い。これに対して、分離型は全体に低く、「家が近所にあった」「自分のきょうだいと友だちだった」のように、学校での取り組み以外の要因も多く見られる。

これをふまえて、「あなたは、この1年の間に次のような場面ではどれくらい交流しましたか」という質問に対する結果が、表7である。

表7から、施設一体型は交流給食（D）および運動会や文化祭（F）が高く、授業よりも教科外活動や行事での交流が多い。分離型も運動会や文化祭（F）が比較的高いが、全体的に施設一体型よりも低く、登下校のとき（A）のように、学校外での交流が多い。

表7 異学年交流のタイミング（「よく交流した」＋「少し交流した」）

	2013年調査		2008年調査	
	一体型	分離型	一体型	分離型
(A) 登下校	29.8%	26.6%	22.0%	22.2%
(B) 授業やステップアップ学習 *	20.9%	12.5%	13.4%	10.2%
(C) 昼休みや放課後 *	30.3%	21.5%	28.1%	18.2%
(D) 交流給食	47.1%	調査せず	61.4%	9.3%
(E) 朝礼 *	15.1%	10.3%	15.2%	9.4%
(F) 運動会や文化祭 *	46.6%	29.6%	47.4%	31.1%
(G) 入学式や卒業式 *	31.9%	18.6%	34.2%	17.8%
(H) 兄弟学年交流	36.3%	調査せず	調査せず	調査せず

さらに、施設一体型小中一貫校で行われるB&S（Brother and Sister）活動に着目すると、以下の傾向が見られる。B&S活動とは、上級生（主として9年生）が下級生（主として1年生）の教室を毎日交代で訪問して、朝、給食、昼休み、清掃をともに行う活動である。「B&S活動は楽しかったですか」という質問（一体型7～9年生のみ）に対して、生徒は80.9%が「とても楽しかった」「まあ楽しかった」と回答しており、2008年調査の71.2%と比べても上昇している。低学年に対する「B&S活動について、つぎのようなことをどれくらいそう思いますか」という質問についても、お兄さんお姉さんに感謝しているという回答をはじめB&S活動を好意的に受け止めており、2008年調査と比べても上昇している。

B&S活動の内容について、「お兄さんやお姉さんと、つぎのようなことがどれくらいありましたか」と質問した結果は、表8の通りである。

表8 B&S で上級生にやってもらった（やった）こと（一体型1・2年生のみ）

	2013 年調 査	2008 年調 査
(A)話をたくさん聞いてもらった	77.3%	73.2%
(B)いろんなお話をしてもらった	74.4%	75.4%
(C)抱っこしてもらったり、手をつないだりした	42.7%	41.4%
(D)困っているときに助けてもらった	64.2%	54.6%
(E)危ないときに注意してもらった	59.9%	52.2%
(F)折り紙をしたり鬼ごっこをしたりして遊んだ	74.7%	64.0%
(G)わがママを言っても許してくれた	39.5%	42.2%

表8から、「(A)話をたくさん聞いてもらった」「(B)いろんなお話をしてもらった」「(F)折り紙をしたり鬼ごっこをしたりして遊んだ」のように、目に見える活動が高い。それに対して、「(C)抱っこしてもらったり、手をつないだりした」「(G)わがママを言っても許してくれた」といった、身体的接触や内面的な交流は低い。

その一方で、上級生の意識や受け止め方は低学年と異なる部分もある。「あなたはB&S活動で1年生と次のようなかかわりがどれくらいありましたか」という質問に対する回答は、表9の通りである。

表9から、7-9年生は1年生に合わせたり(C)、嫌なことをされても許す(J)一方で、1年生に注意をしたり(F)、一緒に遊ぶ(H)比率は低い。低学年の回答と比較すると、話をしたり聞いたりという活動はどちらも高いのに対して、低学年は一緒に遊んでもらったと感じているが、上級生は一緒に遊んだと答えておらず、ずれが見られる。また、上級生は許してくれないと低学年は感じているのに対して、上級生は許してあげたと思っている。このことから、低学年は7-9年生と積極的に関わっているが、

表9 B&S 活動での1年生とのかかわり（一体型7-9年生のみ）（「よくあった」+「少しあった」）

	2013 年調 査	2008 年調 査
(A)1年生にたくさん話しかけた	68.4%	62.5%
(B)1年生の話をたくさん聞いた	65.6%	78.5%
(C)1年生が幼稚なことをしても、相手に合わせた	76.2%	77.7%
(D)1年生を抱っこしたり、1年生に叩かれたりなど触れ合いがあった	53.1%	62.0%
(E)困っている1年生のお世話をした	66.0%	54.7%
(F)いけないことをしている1年生に注意をした	40.3%	32.2%
(G)たくさんの1年生に気を配った	66.0%	63.5%
(H)折り紙をしたり鬼ごっこをしたりして、一緒に遊んだ	37.9%	49.1%
(I)先生に言われなくても、気づいたことはすすんで行動した	55.9%	45.3%
(J)1年生に嫌なことをされても許してあげた	73.5%	71.5%

上級生は低学年と距離を置きながら接している様子がかがえる。ただし2008年調査と比べて、たくさん話しかけた(A)、お世話をした(E)、注意をした(F)、気づいたことはすすんで行動した(I)といった回答が上昇していることから、上級生も積極的に交流しようとはしている。

それでは、小中一貫教育を経験した児童生徒は、上級生あるいは下級生に対してどのような印象をもっているのだろうか。これについて、1-6年生に対して「あなたは7-9年生のお兄さんやお姉さんについて、次のことをどのくらいそう思いますか」と質問した結果が表10である。

表10 異学年イメージ（中学生について）（1－6年生）（「とてもそう思う」＋「少しそう思う」）

	2013年調査		2008年調査	
	一体型	分離型	一体型	分離型
(A)身近に感じる * *	57.8%	45.7%	62.2%	48.0%
(B)「何でもできてすごいなあ」と思う	74.4%	71.4%	82.1%	70.0%
(C)やさしいなと思う * *	75.8%	73.0%	78.4%	64.1%
(D)お兄さんお姉さんといると安心する	63.3%	60.4%	64.7%	53.5%
(E)怖いと思う * *	22.1%	24.5%	19.5%	27.7%
(F)お兄さんお姉さんのようになりたいと思う	70.9%	73.1%	77.5%	66.0%
(G)いっしょに遊びたいと思う * *	61.7%	54.5%	66.4%	52.8%

1－6年生は、何でもできてすごい (B)、お兄さんお姉さんのようになりたい (F) といったあこがれ、尊敬の念や、やさしさ (C) を感じている。その一方で、「(E) 怖いと思う」は低く、親しみを感じていることがわかる。「(A) 身近に感じる」「(G) いっしょに遊びたいと思う」をはじめ、施設一体型の方が分離型よりも概ね数値が高いが、2008年調査と比較すると、両者の差は縮まっている。

これに対して、7－9年生に「あなたは、小さい子（小学校1年生くらいの子）に対して、次のようなことをどれくらいそう思いますか」と質問した結果が、表11である。

表11からは、仲良くしようと思う (A)、助けたい (C)、自分から挨拶したい (D) のように、積極的に関わろうとする一方で、お世話をするのが好き (B)、自分たちも見習うことがある (F) が低いように、好んで関わっていない生徒もいるといった矛盾も見られる。2008年調査と比べて全体的に上昇している一方、

表11 小さい子に対して（7－9年生のみ）（「とてもそう思う」＋「少しそう思う」）

	2013年調査		2008年調査	
	一体型	分離型	一体型	分離型
(A)小さい子と仲良くしようと思う * *	72.0%	82.1%	72.1%	72.3%
(B)小さい子のお世話をするのが好き * *	55.6%	64.8%	54.9%	59.2%
(C)困っている子がいたら助けてあげたい * *	79.3%	87.1%	75.9%	79.3%
(D)知っている子に会ったら自分から挨拶したい * *	71.9%	77.0%	71.4%	67.6%
(E)小さい子のお手本になろうと思う * *	64.0%	72.4%	58.2%	58.7%
(F)小さい子を見て、自分たちも見習うことがあると思う * *	53.0%	61.5%	50.2%	51.7%
(G)小さい子と接すると、優しい気持ちになる * *	67.9%	77.5%	66.5%	68.3%

一部を除いて分離型の方が施設一体型よりも高い。このことは、施設一体型による日常的な交流が、7－9年生の慣れや新鮮さの欠如を生んでいるのかもしれない。

### 3 進級・進路と中1ギャップ

小中一貫教育では、中1ギャップや発達の早熟化に対応して小学校と中学校との接続を意識するために、9年間で6－3年ではなく、4－3－2年等のまとまりにすることが多い。その一方で、分離型では6年生で学校が変わり、学習指導要領および教科書も従来の小学校中学校に対応する形で作成されている。それゆえ、理



念と実践が錯綜しており、児童生徒の意識にも影響を及ぼしていると思われる。ここでは、節目にあたる4・5・6・7・9年のそれぞれについて、児童生徒の意識や不安を明らかにするとともに、6年時の進路についても検討する。

まず、施設一体型の3・4年生に対して1-4年生ブロックの一番上の学年になる(なった)ことについてどのように思っているか(表12)、および4・5年生に対して5年生になる(なった)ことへの不安(表13)を質問した結果は、以下の通りである。

表12 1-4年生ブロックの一番上の学年になる(なった)こと(一体型3・4年生のみ) (「とてもそう思う」+「少しそう思う」)

	2013 年調査	2008 年調査
(A)リーダーになって誇らしい	69.1%	69.3%
(B)いろいろやらなければならないことが多く、大変だ	75.5%	70.7%
(C)下の学年の見本となるよう、しっかりしようと思う	91.0%	88.5%
(D)ひっぱり立場になるのだから、がんばろうと思う	89.4%	86.8%

表13 5年生になる(なった)ことへの不安(一体型4・5年生のみ) (「とても不安に感じた」+「少し不安に感じた」)

	2013 年調査	2008 年調査
(A)教科担任制に変わる事	36.7%	41.0%
(B)標準服が少し変わる事	14.7%	16.7%
(C)教室のある階が変わること	15.9%	29.6%
(D)担任の先生と顔を合わせる時間が減ること	16.4%	27.8%
(E)5-7年生ブロック(中学年団)の一番下の学年になること	18.2%	25.3%
(F)部活動に参加できるようになること	22.4%	25.3%

表12からは、4年生への進級について、「(C)下の学年の見本となるよう、しっかりしようと思う」「(D)ひっぱり立場になるのだから、がんばろうと思う」が、誇らしさや大変さの意識よりも高い。この傾向は、2008年と2013年調査とでほぼ同様である。

5年生になることへの不安(表13)については全体に低いですが、その中では「(A)教科担任制に変わる事」が比較的高い。2008年調査と比べて不安は低下しており、小中一貫教育が浸透している、もしくは学校側での配慮がされていることがうかがえる。このように4・5年生の時点では、児童は進級による責任感を感じつつ、それを前向きに受け止めている。

この傾向は、6年生になってもほぼ同様である。5・6年生に対して、6年生になる(なった)ことをどのように感じているか質問した結果は、表14である。それとともに、6年生卒業後の進路を質問した結果が、表15である。

表14 6年生になる(なった)とき(5・6年生) (「とてもそう感じた」+「少しそう感じた」)

	2013年調査		2008年調査	
	一体型	分離型	一体型	分離型
(A)下級生の見本となるよう、しっかりしなければならない*	68.2%	90.7%	78.7%	87.6%
(B)中学生になる準備をし始めなければならない	75.7%	78.7%	74.2%	78.2%
(C)頼られることが多くなりそうで、うれしい*	27.7%	52.7%	38.7%	47.3%
(D)下の学年を引っぱっていかなければならないので、不安だ*	36.1%	57.4%	45.0%	53.8%

表15 9年生までこの学校に通う予定か（一体型3～6年，分離型5・6年）

	2013年調査		2008年調査	
	一体型	分離型	一体型	分離型
○交流・連携している中学校に通う予定	51.3%	38.3%	49.2%	27.1%
○交流・連携している中学校ではない、公立の中学校	1.9%	16.0%	2.7%	22.8%
○国立・都道府県立・私立中学校	23.0%	26.9%	11.6%	29.6%
○まだ決めていない	22.5%	16.4%	35.1%	17.9%

表14から、「(A) 下級生の見本となるよう、しっかりしなければならない」「(B) 中学生になる準備をし始めなければならない」が高い。2008年と2013年調査との間に大きな違いはないが、施設一体型と分離型とでは、分離型の方がいずれも高い比率を示している。下級生の見本 (A)、頼られる (C)、下の学年を引っ張る (D) 等、分離型における学校内の最上級生としての立場が、このような違いを生んでいると思われる。

進路については、表15のように交流・連携している中学校に通う予定の児童が多いが、分離型は分散している。国立・都道府県立・私立中学校への進学は分離型の方が高いが、施設一体型にも少なからず見られる。施設一体型の場合、学年が進むにつれて「まだ決めていない」から交流・連携している中学校への進学が増えていることから、中学受験を意識する児童は3年生からすでに小中一貫教育には固執していないことがわかる。

次に7年生は、6-3年制では中学1年生として、また4-3-2年制ではブロックの最上級生の位置づけとなる。これらについて、「あなたは、7年生になったときどのように感じましたか」(表16)、「あなたは、7年生になるとき次のことをどのくらい不安に感じていましたか」(表17)と質問した結果は、以下の通りである。

表16 7年生(中学生)になったとき(7-8年生)〔「とてもそう感じた」+「少しそう感じた」〕

	2013年調査		2008年調査	
	一体型	分離型	一体型	分離型
(A) ちょっと大人になったような気がした *	37.8%	48.4%	39.3%	47.7%
(B) 気持ちを新たにしようと思った *	68.9%	71.2%	62.6%	67.0%
(C) 下級生の手本になるように、しっかりしようと思った *	49.5%	52.5%	35.4%	33.7%
(D) 7年生(中学生)になれてうれしいと思った *	49.6%	64.8%	47.0%	53.8%
(E) もう7年生なのに、小学生が同じ学校にいるのは嫌だなと思った	26.9%	調査せず	51.9%	調査せず
(F) 5-7年生ブロック(学団)のリーダーになって、誇らしかった	18.4%	調査せず	12.6%	調査せず
(G) ブロック(学団)のリーダーとしてやらなければならないことが多そうで、大変だと思った	36.3%	調査せず	35.9%	調査せず

表17 7年生(中学生)になる(なった)ことへの不安(6-8年生)〔「とても不安に感じた」+「少し不安に感じた」〕

	2013年調査		2008年調査	
	一体型	分離型	一体型	分離型
(A)新しい友だちができるかどうか	55.6%	55.0%	62.2%	52.0%
(B)いろいろな小学校から生徒が集まってくる	45.9%	43.9%	46.1%	41.2%
(C)教科が増えたり、教科名が変わったりすること *	36.6%	44.1%	37.3%	41.8%
(D)勉強についていけるか	66.9%	69.3%	65.9%	69.8%
(E)テストや成績のつけ方 *	58.7%	61.0%	62.3%	63.5%
(F)教科ごとに教わる先生が変わること *	17.1%	22.6%	15.2%	22.5%
(G)学校の決まりや校則 *	28.9%	33.6%	34.2%	36.4%
(H)担任の先生との関係がうまくいかどうか *	33.8%	36.6%	33.2%	36.9%
(I)部活動に入ること *	28.8%	38.7%	36.0%	40.7%
(J)先輩とうまくやっていたりいけるかどうか *	37.8%	53.7%	56.4%	60.5%
(K)5-7年生ブロック(中学年団)の一番上の学年になること	14.8%	調査せず	13.0%	調査せず

表16の通り、7年生になった時の意識として多いのは、「(B)気持ちを新たにしようと思った」である。だがそれ以外については全体的に低く、施設一体型と分離型とでは、概ね分離型の方が高い。このことは、施設一体型の学校に

引き続き通学することが、「中1ギャップ」の障壁を低くするとともに喜びや自立といった意識の変化も少なくなることを示している。2008年調査と比べて、「(E)もう7年生なのに、小学生が同じ学校にいるのは嫌だと思った」は大きく低下しており、施設一体型一貫校に生徒が慣れていく様子が見えてくる。

具体的な7年生の不安は、表17から「(D)勉強についていけるか」「(E)テストや成績のつけ方」といった学力面が最も高い。友人(A)や先輩(J)等の人間関係についての不安がそれに続くが、2008年調査と比べて先輩に関する不安は低下している。教科担任制(F)や校則(G)、担任との関係(H)に対する不安は、いずれも分離型の比率が高い。施設一体型における「(K)5-7年生ブロック(中学年団)の一番上の学年になること」についても低く、中1ギャップに対する不安と同時にリーダーとしての意欲も平板になっていることがわかる。

最後に、最上級生である9年生になってどのように感じたかを質問した結果が、表18である。

表18 9年生(中3)になったとき(9年生)〔「とてもそう思った」+「少しそう思った」〕

	2013年調査		2008年調査	
	一体型	分離型	一体型	分離型
(A)大人になったような気がした	42.8%	43.2%	54.0%	47.0%
(B)一番上の学年になって、誇らしかった	42.0%	44.6%	48.2%	39.3%
(C)学校の最上級生だから、学校をひっぱっていかうと思った *	50.9%	58.3%	52.9%	47.5%
(D)下の学年の見本となるよう、しっかりしようと思った *	59.5%	68.0%	68.6%	52.9%

(E)いよいよ卒業の年だから、気を引きしめようと思った *	71.1%	76.2%	74.4%	77.0%
(F)リーダーとしていろいろやらなければならぬことが多いので、大変だと思った	52.8%	47.2%	57.6%	47.0%
(G)卒業後のことを考えると、不安に感じた	62.9%	66.0%	64.9%	58.3%
(H)早く卒業したいと思った	39.0%	40.6%	35.6%	53.9%

表18から9年生の回答は、しっかりしよう(D)、気を引きしめる(E)が、誇らしい(B)、引っぱっていこう(C)よりも高い。この他に、「(G)卒業後のことを考えると、不安に感じた」が高く、「(A)大人になったような気がした」「(H)早く卒業したいと思った」は比較的低い。リーダーとしての大変さ(F)についても、8年生時に考えていた以上に大変さを実感していると思われる。2008年調査と比べて、施設一体型はほとんどの項目で低下、逆に分離型は上昇しており、そのため分離型の比率が高くなっている。

おわりに

今回の調査の結果を、先行研究とともに考察しながらまとめると、以下ようになる。

第1節で扱った教師と教科担任制については、児童生徒は教師のことを気軽に話ができて助けてくれる存在と好意的にとらえているが、児童生徒の気持ちを理解することや、いろいろな話を聞くといった内面的なつながりについては、それほどではない。学年ごとの違いについては、特に施設一体型では5年生でやや比率が低下するものの、7-9年での変化は少ない。これは、木村、酒井、加藤(2008)の調査による、対教師関係は小6から中2にかけて悪化し続けると

いう結果とは異なっており、施設一体型一貫校における教師生徒間の関係の連続性と、自分の教わるあるいは教わった教師が常にいることの効果を示している。

また教科担任制については、全教科とも児童生徒は良い、あるいは楽しみにしており、特に理科、体育、家庭科、音楽、図工、英語といった教科において顕著である。その理由として児童生徒は、教科内容の専門性の高さをあげている。これについて明石(2002)は、小学校時代は35%が期待、50%が不安であったのに対して、中学校になると満足する者が72%に達すると述べている。今回の調査で既実施学年は同様の結果になるとともに、未実施学年も教科担任制への期待がさらに高く、高学年への教科担任制が児童に浸透していることがうかがえる。

第2節で扱った異学年交流については、学校行事や教科外での活動を中心に交流があり、児童生徒は概ね好意的に受け止めている。特に低学年の高学年に対する評価や意識は高く、施設一体型ではその傾向が強い。これに対して、高学年の低学年に対する評価や意識については施設一体型が高いとは限らず、受け止め方も低学年とは異なる面も見られる。小学校における異年齢交流を行った児童に対するアンケートを実施した金子、水谷内(1997)によれば、上級生といて楽しい、親切で頼りになる上級生がいると回答した者は1・2年生で高く、学年とともに下降傾向を示している。小中一貫教育では上級生が7-9年生になるものの、同様の傾向である。

第3節で扱った進級・進路と中1ギャップについては、児童生徒は各学年とも責任感が強いが、学年が進むにつれて不安や困難感が増大している。また中1ギャップについて、7年生の不安は勉強、人間関係の順に高く、教科担任制や校則といった中学校特有の制度についての不安は低い。全体に施設一体型7年生の不安は低く、特に部活動や先輩との関係のように、学校内で見聞している内容についてその傾向は顕著である。しかし9年生では、責任感とともに不安や大変さも増大して、9年間の最上級生とし

での立場を際立たせている。その一方で、中学受験を考える6年生も多くいて、7年生からの学級増とともに小中一貫教育が不完全な状態で進んでいることを示している。

中1ギャップについて、明石(2002)は6年生が中学入学へ不安に思っていることとして、定期テスト、学校のきまり、教科内容の詳しさ等をあげており、勉強が不安の中心であることは今回の調査と一致している。また、小6から中2にかけての学校適応過程に関する横断的および縦断的調査を行った小野寺(2009)においても、テストと勉強が不安の上位を占めている。同様に都筑(2001)は、中学校への進学にもなると児童の意識がどのように変化するかを継続的に調べており、そこでも中学校への不安は勉強、いじめ、先輩、友だちの順となっている。

さらに都筑(2002)は、中学校入学についての期待と不安の有無について、「期待ありー不安あり」「期待ありー不安なし」「期待なしー不安あり」「期待なしー不安なし」の4群に分けて分析している。その結果、不安と期待を同時に抱くことは矛盾とはならず中学校生活を積極的意欲的に過ごす原動力の一部分になっていること、不安の感情を多く持つ子どもほど身体的精神的疲労とともに将来に対しても空虚感を強く感じていること、期待も不安も抱かない子どもは入学後に楽しみも少なく悩みの程度が強くなっていることを論じた。このことから、中1ギャップによる不安を低減させるだけでなく、進級進学による期待をどのように持たせるかを、小中一貫教育において考えることが求められる。それとともに、今回の調査では施設一体型生徒の意欲の平板化が見受けられており、「期待も不安も抱かない子ども」にしないための工夫も合わせて必要である。

今回の調査対象は、施設一体型一貫校であっても7年生から入学者が増加する点で、学年ごとの集団が均質とは言えない面がある。また調査の分析も単純集計にとどまり、学年間の違いや各項目間の相関等について不十分なところが多い。社会的貢献、情緒面、友人関係、自己成長の自覚といった社会力についても同時に調査

しているが、本稿では扱っていない。これらについての詳細な分析は、今後の課題である。

## 付記

本稿は、2011(平成23)–2014(平成26)年度科学研究費基盤研究(C)「施設一体型小中一貫校における児童生徒の成長過程と教育実践」(研究代表者樋口直宏 課題番号23531041)の成果の一部である。調査は、共同研究者である石井久雄氏、遠藤宏美氏とともに実施した。

## 参考文献

- 明石要一(2002).『学級の集団的機能を見直す』. 明治図書.
- 小野寺汐美(2009).「小中移行期における学校適応過程に関する一研究」.『岩手大学大学院人文社会科学部研究紀要』, 第18号, pp.19–40.
- 金子劭榮, 水谷内郁子(1997).「小学校における異年齢交流実践と児童のうけとめ」.『金沢大学教育学部紀要(教育科学編)』, 第46号, pp.193–201.
- 河原国男, 中山迅, 助川晃洋(編著)(2014).『小中一貫・連携教育の実践的研究—これからの義務教育の創造を求めて—』. 東洋館出版社.
- 木村文香, 酒井朗, 加藤美帆(2009).「小中移行期における学校適応の変化」.『情報と社会』, 江戸川大学, 第19号, pp.15–24.
- 都筑学(2001).「小学校から中学校への進学にもなると子どもの意識変化に関する短期縦断的研究」.『心理学』, 心理科学研究会, 22(2), pp.41–54.
- 都筑学(2002).「小学校6年生の中学校進学に対する意識とその関連要因」.『教育学論集』, 中央大学教育学研究会, 第44集, pp.67–84.
- 西川信廣(2014).「義務教育学校における多様性と平等性に関する実証的研究—施設一体型小中一貫教育校に着目して—」.『京都産業大学総合学術研究所所報』, 9, pp.17–31.
- 樋口直宏, 石井久雄, 遠藤宏美, 栗山靖弘(2009a).「小中一貫教育が児童・生徒の人間形成におよぼす影響に関する予備的考察—質問紙調査票の作成—」.『立正大学大学院心理学研究科研究紀

要』，第4号，立正大学大学院心理学研究科，  
pp. 1-13.

樋口直宏，石井久雄，遠藤宏美，栗山靖弘 (2009b).  
「施設一体型一貫校の子どもたちにおける学校生活  
上の変化—質問紙調査結果の分析を中心に—」.  
『小学校中学校一貫教育の効果検証〈品川区  
教育改革の評価 第3年次報告書〉』，品川区  
教育委員会，pp. 99-139.

## Consciousness of Students in Unified Primary-Secondary School Educational System: Comparative Study of Questionnaire Survey

Naohiro HIGUCHI

This paper focuses on results of a questionnaire survey related to the unified primary-secondary school educational system. Topics included “homeroom teacher and class/subject teacher system,” “interaction between different grade students” and “advancement and ‘gap from primary school to secondary school.” The questionnaire survey was carried out in February and March 2013, and 4385 students responded. The results are as follows.

Students regard teachers as friendly, easy to talk to, and helpful. However, students believe that teachers do not understand the students’ minds and, on the other hand, students do not attempt to understand their teachers. Students are motivated and satisfied by the class/subject teacher system for science, physical education, home economics, music, art and English. The students’ principal reason for motivation and satisfaction is subject expertise.

Students from different grades interact with each other in school events or extra-curricular activities, and the lower or middle grade students, especially in a unified primary-secondary school look forward to such events. On the other hand, higher grade students do not necessarily look forward to such interaction.

When students advance to the next grade, their sense of responsibility strengthens but their level of anxiety and difficulty also steadily increases. Specifically, when students enter secondary school or advance to the seventh grade, worries increase about their studies and ability to make friends. Some sixth grade students prepare for private school entrance examinations, so the unified primary-secondary school educational system is incomplete. Seventh grade students of unified primary-secondary schools feel less anxiety than their peers at separated schools. Ninth grade students sense a great amount of pressure as the senior.